

不明の1件を除きすべて居住内で発生した事故であった。

表10に、灯油などを含む工業用品が食品へ混入した14事例を示した。患者数は2~33名であった。起因物質は、灯油が5件、授業の実験で使用したホウ砂、水酸化ナトリウム、塩酸、ドライアイスなど、そのほか金属潤滑油、有機溶剤のトルエン、工業用洗剤、不凍液など様々であった。14事例中10事例に、受信時すでに口腔咽喉違和感、悪心、嘔吐、腹痛、下痢などの消化器症状等が確認されている。患者が33名発生したのは、中学校の理科実験で、ミカンの房を塩酸で溶かし、その後、水酸化ナトリウムで中性に戻してミカンを試食したという事例であった。そのほか工事の不備で飲料水へ不凍液が混入した事例などがあった。

表11に、農業用品が食品へ混入した11事例を示した。患者数は2~約30名であった。起因物質は、殺虫剤5件(有機リン系2件、カーバメート系3件)、除草剤4件、殺菌剤1件、不明の農業1件であった。症状が発現したのは4件であった。そのうち1件は、故意に不明の農業を牛乳に混入された可能性がある症例で、1名はコップ1杯、1名は口に含み吐き出したという事例で、徐脈、傾眠が発現していた。また、症状はなかったが約30名の患者(摂食者)が発生した事例は、幼稚園において1週間前に殺虫剤を散布したブロッコリーを食べた事例で、散布から2週間経過後に食べると書いてあったのに気づき、その残留農業を心配しての問い合わせであった。

表12に、医薬品(医療用、一般用)が食品へ混入した6事例を示した。患者数は2~3名であった。起因物質は、ホウ酸4件、インドメタシン含有貼付剤1件、次亜塩素酸塩含有哺乳ビン

用殺菌消毒剤1件であった。ホウ酸は重曹や健康食品と誤って使用されていた。症状があったのは2件で、眼科用のホウ酸を牛乳に溶かして飲んだ中学生の事例(故意かどうか不明)と、哺乳ビン用殺菌消毒剤の希釈液をペットボトルに入れておいたことを忘れて子どもに飲ませた事例で、いずれも口腔咽喉の痛みを訴えていた。

3) 食品と誤って製品を摂取した事例

(患者2名以上)

(1) 2003-2007年受信統計(JPIC)

食中毒事例には分類されないが、製品の形状が食品と類似していたため、あるいは食品や飲料と勘違いして摂取したために発生した急性中毒(患者2名以上)に関する問い合わせについても、事故防止の観点から調査を実施した。

2003-2007年の過去5年間に、食品と誤って製品を摂取した事例をJPIC受付登録データベースから抽出し、その件数を表13に示した。

2003年10件、2004年8件、2005年12件、2006年8件、2007年16件、合計54件で、2007年に家庭用品のおもちゃが増加していた。

(2) 2007年受信事例の詳細(JPIC)

2007年に受信した「食品と誤って製品を摂取した」16事例について起因物質、発生月、都道府県、患者数、患者年齢(最重症者、または小児・高齢者等の弱者等)、連絡者、発生場所、状況(発生理由)、受信時までの症状、経緯の詳細を表14に示した。

ドーナツやソフトクリームなど食品とそっくりなおもちゃを作る製品で作成した食品類似品を誤食したケースが多かった。また、食品と勘違いする様なネーミングの製品の誤食、ゼリーなど形状が食品と類似した製品の誤食、思い込みや勘違いによる製品の誤飲・誤食、ペットボ

トルなど飲料容器へ製品を移し替えたことによる誤飲などが中毒事故の原因であった。

3. 食品に化学物質が混入し発生した中毒事件 2008年 (JPIC)

1) 中国産冷凍ギョウザに混入したメタミドホスによる急性中毒事件

JPICでは、2008年1月23日、千葉県の医療機関から「有機リン中毒の小児を含む患者家族複数名が、これから転院してくるため中毒情報を事前に入手したい。」という問い合わせを受信した。JPICでも報道発表まで、原因について知りえなかったが、本症例が中国産冷凍ギョウザに混入されたメタミドホスによる中毒の最初の問い合わせであった。

その後1月30日に、中国産冷凍ギョウザから日本では農業登録がない有機リン系殺虫剤のメタミドホスが検出され、そのギョウザを食べた複数名が中毒症状を呈したという報道発表があった。この報道発表直後からメタミドホス中毒関連の問い合わせが急増した。最初の患者の問い合わせがあった1月23日～2月末までに、JPICで受信した関連の問い合わせは、163件に上った(図1)。

なお、報道発表後、2月2日から開始された厚生労働省の輸入食品に係る冷凍ギョウザに関する相談は2月末日までに194件であった(図2)。また、同様に2月末日までの農林水産省輸入食品に係る相談件数は102件(図3)、食品安全委員会中国産食品に関する相談件数は64件(図4)、国民生活センター中国産ギョウザ問題に係る健康被害相談件数は11件(図5)であった²¹⁾。

JPICで受信した163件の問い合わせ者別内訳は、医療機関40件、一般市民58件、マスコミ

38件、厚生労働省医薬食品局食品安全部、同省大臣官房厚生科学課および食品安全委員会情報・緊急時対応課などの行政や保健所22件、販売会社等5件であった。

実際に関連する食品などを食べて曝露した可能性があるという問い合わせは91件であり(他の問い合わせは、毒性や治療などに関する情報提供のみ)、そのうち症状の訴えがあったのは71件(100名)であった。

電話問い合わせの段階では因果関係は不明であるが、訴えがあった症状は、下痢49名、嘔吐31名、悪心28名、腹痛15名、めまい9名、頭痛7名、しびれ4名、目のかすみや縮瞳等(含疑い)5名、コリンエステラーゼ (ChE) 値の低下(含疑い)3名であった(図6)。

その後の調査によりメタミドホスによる急性中毒が確定した10症例のうち、5症例が1月23日にJPICへ問い合わせがあった家族の症例であった。JPICは、厚生労働省に設置された「中国産冷凍食品による薬物中毒事案の実態把握に関する検討会」に委員あるいはオブザーバーとして協力し、急性中毒が確定した10症例について、受診した医療機関へ訪問調査を実施した。

また、報道発表後、JPICは1月31日に、一般市民向けおよび医療従事者向けホームページの各ニュース欄へメタミドホス中毒に関する情報を掲載した。さらに、その後検出されたジクロロボス (DDVP) に関する情報を2月5日、ホレートとバラチオン等に関する情報を2月23日に掲載した。一般市民向けおよび医療従事者向けホームページの各アクセス件数の経時的変化を図7、図8に示した。

2) その他の化学物質混入事件

2008年には、中国産冷凍ギョウザに関する事

件の後、引き続き様々な化学物質の食品への混入事件が発生し社会問題となった。

JPIC へも問い合わせが相次いだ。7つの化学物質混入事件における問い合わせ状況、および受信時までには訴えがあった症状などについて、表15～21にまとめた。なお、原因物質の分析結果などにより実際に因果関係が明らかになった症例は、警察から問い合わせがあった中国産冷凍インゲンに混入したジクロロボス (DDVP) による中毒症例の1件のみである。

ペットボトルの茶系飲料から検出された除草剤グリホサートに関する問い合わせ (4月5日～) は6件で、曝露した可能性があるという問い合わせは3件であった。問い合わせ者は、一般市民3件 (症状あり3件)、マスコミ3件であった (表15)。

事故米穀から検出されたメタミドホス、アセタミプリド等に関する問い合わせ (9月5日～) は7件で、曝露した可能性があるという問い合わせは3件であった。問い合わせ者は、医療機関2件 (症状あり2件)、一般市民3件 (症状あり1件)、マスコミ2件であった (表16)。

中国製牛乳から検出されたメラミンに関する問い合わせ (9月21日～) は19件で、回収対象商品やピザなどを食べ曝露した可能性があるという問い合わせは6件であった。問い合わせ者は、医療機関1件、一般市民14件 (症状あり1件)、企業2件、マスコミ2件であった (表17)。

中国産冷凍インゲンから検出されたDDVPに関する問い合わせ (10月14日～) は5件で、曝露した可能性があるという問い合わせは4件であった。問い合わせ者は、医療機関1件 (症状あり1件)、一般市民2件 (症状あり2件)、警察1件、マスコミ1件であった (表18)。

カップラーメン等から検出された防虫剤に関

する問い合わせ (10月24日～) は9件で、曝露した可能性があるという問い合わせは4件であった。問い合わせ者は、医療機関1件 (症状あり1件)、一般市民6件 (症状あり2件)、行政1件、マスコミ1件であった (表19)。

食肉加工工場の地下水から検出されたシアン化合物に関する問い合わせ (10月25日～) は8件で、曝露した可能性があるという問い合わせは6件であった。問い合わせ者は、医療機関1件、一般市民6件 (症状あり4件)、企業1件であった (表20)。

ウィンナーから検出されたトルエンに関する問い合わせ (10月30日～) は1件で、曝露した可能性があるという問い合わせはなかった。問い合わせ者は、マスコミで、毒性や症状に関する質問であった (表21)。

D. 考察

日米の中毒センターで受信している自然毒、食品、食中毒に関する中毒事故の受信状況を調査した。その結果、中毒センターでは、家庭用品や医薬品のみではなく、自然毒や食品による急性中毒、また食品への化学物質混入に関する問い合わせも多く受信していることが判明した。

化学物質による健康被害事故に係る情報は、一部の国、あるいはドイツ語圏の国々、EU諸国など特定地域の中毒センターにおいて、中毒症例収集システムにより迅速に収集され、Webやメーリングリスト等を通じて速やかに注意喚起がなされている。食品への化学物質混入も同様であり、近年は、各国の中毒センターでヒト急性中毒事故対応と事故防止活動が強化されている。Toxicovigilance活動をテーマとした国際学会シンポジウム²⁰⁾では、各国中毒センターおよび中毒関連機関の今後の課題として、エビデ

ンスの高いヒト中毒症例を収集し評価することの必要性、国際比較が可能なデータの必要性、化学物質による事故防止活動強化などが挙げられている。わが国でもヒト中毒症例収集体制を強化し、食品への化学物質混入による中毒事件に迅速に対応するためのケミカルサーベイランスシステムを構築するが必要である。

また、食品に化学物質が混入した食中毒事例ではないが、食品とそっくりなおもちゃや、食品と勘違いする様な商品名や香りの製品による中毒事故は、製品形状や製品表示の改良により事故を防止することが可能であるため、企業や業界と協力して改善する必要があると考える。ペットボトルなど飲料や食品用の容器への化学製品や化学物質の移し替えによる事故も発生しており、飲食容器への移し替えを行わないよう実際の事故事例を具体的にあげて周知させるなど、一般市民に対する啓発が必要である。これらは今後実践すべき課題である。

2008年1月23日、千葉県医療機関からJPICへ「有機リン中毒の小児を含む患者家族複数名が、これから転院してくるため中毒情報を事前に入手したい。」と連絡があった。これがJPICで受信したメタミドホス混入中国産冷凍ギョウザによる中毒事例の第一報であったことが、後に判明した。その後報道発表まで、事前に行政等関連機関から本件に関する情報提供はなく、1月30日、マスコミからの問い合わせにより事件を知る結果となった。食中毒や他殺・心中等事件の可能性が否定できない本件のような食品への化学物質混入中毒事件では、関連諸機関への連携は未だ不十分であり、事件発生初期の対応が遅れた。しかし、1月23日～2月末までに、JPICが受信した関連の問い合わせは163件に上った。これは2月2日から開始された厚生労働

省の輸入食品に係る冷凍ギョウザに関する相談件数194件に匹敵し、また、農林水産省の輸入食品に係る相談件数102件、食品安全委員会の中国産食品に関する相談件数64件、国民生活センターの中国産ギョウザ問題に係る健康被害相談件数11件を上回る件数であった²⁾。今回の受信結果から、平素から24時間365日、化学物質の急性中毒に関する情報提供を実施しているJPICの役割と重要性が再認識された。

報道発表後、JPICは1月31日にホームページのニュース欄へ関連情報を掲載した。さらに、厚生労働省医薬食品局食品安全部、同省大臣官房厚生科学課および食品安全委員会情報・緊急時対応課等と連絡を密にし、情報交換およびホームページ掲載用資料の確認等の協力を行った。また、厚生労働省に設置された「中国産冷凍食品による薬物中毒事案の実態把握に関する検討会」の委員として協力し、メタミドホスによる急性中毒が確定した10症例について、受診した医療機関へ訪問調査等を実施した。

その後も2008年は、ペットボトルの茶系飲料から検出された除草剤グリホサート、事故米穀から検出されたメタミドホス、アセタミプリド等、中国製牛乳から検出されたメラミン、中国産冷凍インゲンから検出されたDDVP、カップラーメン等から検出された防虫剤、食肉加工工場の地下水から検出されたシアン化合物、ウイナーから検出されたトルエンに関する問い合わせなど食品に絡む事件の問い合わせが相次いだ。

特に「中国における牛乳へのメラミンの混入事案」は、食品の安全性に係る大きな信頼を損ねる結果となり一般市民に大きな不安を与えた。窒素含量の多いメラミンを食品へ添加すると、たん白質含量を高く偽ることができるため、乳製品へメラミンが意図的に混入された。中国で

は、メラミンが混入した乳製品を摂取し、2008年11月までに、入院した乳幼児は50,000人を越え、6人の死亡が確認されている。日本においては、中毒患者は発生しなかったものの、中国産の乳・乳製品および食品添加物、またそれらを使用した食品からメラミンが検出されているほか、中国産の卵・卵製品からもメラミンの検出が報告され、食品の回収措置がとられた。国内では内閣府、食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省などからメラミンやイソシアヌル酸に係る情報が提供された。また、海外では、世界保健機構 (WHO)、米国食品薬品庁 (FDA)、欧州食品安全機関 (EFSA)、カナダ保健省などがリスクに関する見解を発表した。2008年12月には、メラミンとシアヌル酸に関する専門家会合がカナダのオタワで開催され、分析方法、毒性評価、情報の収集と共有化、今後の研究などについて様々な提言がなされた²⁵⁻³²⁾。

食品への化学物質混入事件の発生時の迅速な情報収集と対応、および一般市民への広報は、今後ますます重要な課題である。

化学物質および自然毒による大規模食中毒事件の発生時には、24時間365日電話対応を実施しているJPICでは、早期から対応が可能であり、食品の安全に係る機関は、JPICが保有するデータをよく活用し、かつ、化学物質等が原因と考えられる食中毒発生時にはよく情報交換を行いながら対応することが望まれる。平時からJPICと食品関連機関、関係部署との連携強化を図る必要があると考える。

E. 結論

今回の調査から、日本中毒情報センターの受信事例は、現在の食中毒統計では十分には把握できていない化学物質および自然毒に起因する

食中毒事例の情報源となり得ること、ならびに化学物質の食品混入事件時には中毒事例収集機関となり得ることが判明した。今後、わが国における化学物質および自然毒に起因する食中毒事例の収集および食品への化学物質混入事件への対応のために、化学物質による食中毒事例収集システム、および症候群による原因物質診断補助システム、さらに事件発生時に迅速に対応するための関連諸機関の連携体制構築が必要であると考える。

参考文献

- 1) (財) 日本中毒情報センター：1998年受信報告。中毒研究 1999；12：187-207.
- 2) (財) 日本中毒情報センター：1999年受信報告。中毒研究 2000；13：201-220.
- 3) (財) 日本中毒情報センター：2000年受信報告。中毒研究 2001；14：145-164.
- 4) (財) 日本中毒情報センター：2001年受信報告。中毒研究 2002；15：195-225.
- 5) (財) 日本中毒情報センター：2002年受信報告。中毒研究 2003；16：213-243.
- 6) (財) 日本中毒情報センター：2003年受信報告。中毒研究 2004；17：173-203.
- 7) (財) 日本中毒情報センター：2004年受信報告。中毒研究 2005；18：165-195.
- 8) (財) 日本中毒情報センター：2005年受信報告。中毒研究 2006；19：173-203.
- 9) (財) 日本中毒情報センター：2006年受信報告。中毒研究 2007；20：159-189.
- 10) (財) 日本中毒情報センター：2007年受信報告。中毒研究 2008；21：201-232.
- 11) American Association of Poison Control Centers: 1998 Annual Report of the American Association of Poison Control

- Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 1999; 17: 435-87.
- 12) American Association of Poison Control Centers: 1999 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2000; 18: 517-74.
- 13) American Association of Poison Control Centers: 2000 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2001; 19: 337-95.
- 14) American Association of Poison Control Centers: 2001 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2002; 20: 391-452.
- 15) American Association of Poison Control Centers: 2002 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2003; 21: 353-421.
- 16) American Association of Poison Control Centers: 2003 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2004; 22: 335-404.
- 17) American Association of Poison Control Centers: 2004 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers Toxic Exposure Surveillance System. *Am J Emerg Med.* 2005; 23: 589-666.
- 18) American Association of Poison Control Centers: 2005 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers' national poisoning and exposure database. *Clinical Toxicology.* 2006; 44: 803-932.
- 19) American Association of Poison Control Centers: 2006 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers' National Poison Data System (NPDS): *Clinical Toxicology.* 2007; 45: 815-917.
- 20) American Association of Poison Control Centers: 2007 Annual Report of the American Association of Poison Control Centers' National Poison Data System (NPDS): 25th Annual Report: *Clinical Toxicology.* 2008; 46: 927-1057.
- 21) 内閣府ホームページ、中国産冷凍ギョウザ問題、食品による薬物中毒事案について (第1報~第50報)、(2009年10月30日)、
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/kenkouhigai/kenkouhigai.html>、2009年2月27日。
- 22) The International Congress of Toxicology - XI. Symposium Toxicovigilance: The Collection, Reporting and Use of Human Data. (Montril, 2007.7.15-18) Abstract.
- 23) 内閣府ホームページ、中国における牛乳へのメラミン混入事案への対応について (2008年9月22日)
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/080922meramin.pdf>、2009年2月27日。
- 24) 食品安全委員会ホームページ、メラミン等による健康影響について (2008年12月18日)、
<http://www.fsc.go.jp/emerg/melamine100>

- 9.pdf、2009年2月27日。
- 25) 厚生労働省ホームページ、中国における牛乳へのメラミン混入事案について(対応について第1報～第23報、メラミン検査実地状況)、(2009年2月25日)、
<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/iyaku/syoku-anzen/china-milk/index.html>、2009年2月27日。
- 26) 農林水産省ホームページ、中国産牛乳が使用されている食品に対する農林水産省の対応について(2008年9月20日)、
http://www.maff.go.jp/j/press/seisan/c_gyunyu/080920.html、2009年2月27日。
- 27) 農林水産省ホームページ、中国産乾燥鶏卵からのメラミンの検出に対する農林水産省の対応について(2008年10月16日)、
http://www.maff.go.jp/j/press/seisan/c_gyunyu/080920.html、2009年2月27日。
- 28) 世界保健機構(WHO)ホームページ、Melamine-contamination event(2009年2月16日)
http://www.who.int/foodsafety/fs_management/infosan_events/en/index.html、2009年2月27日。
- 29) 米国食品医薬品庁(FDA)ホームページ、Interim Safety and Risk Assessment of Melamine and its Analogues in Food for Humans(2008年10月3日)、
<http://www.cfsan.fda.gov/~dms/melamra3.html>、2009年2月27日。
- 30) 欧州食品安全機関(EFSA)ホームページ、Statement of EFSA on risks for public health due to the presences of melamine in infant milk and other milk products in China(2008年9月24日)、
http://www.efsa.europa.eu/EFSA/efsa_locale-1178620753812_1211902098495.htm、2009年2月27日。
- 31) カナダ保健省ホームページ、Questions and Answers - Melamine、(2008年12月5日)
<http://www.hc-sc.gc.ca/fn-an/securit/c-hem-chim/melamine/qa-melamine-qr-eng.php>、2009年2月27日。
- 32) WHOホームページ、Expert meeting to review toxicological aspects of melamine and cyanuric acid(2008年12月1-4日)
http://www.who.int/foodsafety/fs_management/conclusions_recommendations.pdf、2009年2月27日。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 黒木由美子、飯田薫、吉岡敏治：特別緊急報告・中国製冷凍餃子中毒事件、日本中毒情報センターにおける受信状況と対応。中毒研究22(1)；2009(印刷中)。

2. 研究発表

- 1) 黒木由美子、飯田薫、吉岡敏治：特別緊急報告・中国製冷凍餃子中毒事件、日本中毒情報センターにおける受信状況と対応。日本中毒学会総会・学術集会、和歌山、2008年7月11-12日。
- 2) Y. Kuroki, K. Iida, T. Yoshioka: Recent Topics of Chemical Poisoning Incidents in Japan: Methamidophos Poisoning and Hydrogen Sulfide Poisoning., Japan

-United States Chemical and Biological
Collaboration Conference, Tokyo, Japan,
2009. Feb. 17-18.

- 3) 飯田薫、黒木由美子、吉岡敏治、他：日本中
毒情報センターで受信した食品への化学物質
混入事例の実態調査。日本中毒学会総会・学
術集会、東京、2009年7月24-25日(予定)。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表1 JPIC 自然毒、食品に関する急性中毒受信事件数(1998~2007年)

	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	計	総受信事件数 に対する割合
植物	304	373	339	366	370	423	353	343	365	468	3,704	1.05%
シユウ酸塩含有植物	21	49	30	48	40	42	32	26	31	50	369	
ドングリ	37	28	42	39	35	47	26	37	37	41	369	
ジャガイモ	31	39	37	30	34	34	38	31	20	44	338	
青酸配糖体含有植物	26	37	26	29	38	26	38	34	30	36	320	
スイセン	11	15	16	7	17	17	11	12	18	26	150	
ギンナン	7	4	3	6	8	11	8	7	9	10	73	
トリカブト	4	5	4	5	7	5	17	6	7	7	67	
スズラン	5	2	3	6	5	4	1	10	7	9	52	
テオウセンアサガオ	4	0	4	8	10	7	3	5	7	4	52	
シキミ	7	9	5	3	3	5	3	3	3	4	45	
バイケイソウ	2	3	3	5	9	6	3	4	5	0	40	
ヨウシュヤマゴボウ	0	0	0	15	1	2	2	7	8	5	40	
その他の毒性植物	64	89	95	91	71	122	97	83	104	139	955	
無毒の植物	43	50	46	37	35	51	32	37	39	54	424	
毒性不明の植物	42	43	25	37	57	44	42	41	40	39	410	
きのこ	86	61	82	93	72	33	48	39	42	40	596	0.17%
有毒きのこ	45	39	55	68	48	15	25	18	16	21	350	
マシクマツシユルム	10	19	32	55	33	2	0	0	1	0	152	
ツキヨダケ	10	11	6	2	5	3	8	2	4	2	53	
ドクササコ	3	2	3	4	1	1	0	0	2	2	18	
ドクツルダケ	5	1	0	0	0	2	0	2	0	2	12	
シロタゴテンダケ	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3	
その他の有毒きのこ	17	4	14	6	9	7	17	14	9	15	112	
無毒のきのこ	1	2	3	1	4	6	2	2	0	4	24	
不明のきのこ	40	20	24	24	20	12	21	21	22	18	222	
水生動物	43	47	49	30	35	36	30	39	36	31	376	0.11%
フダ	22	21	23	14	19	11	8	12	7	12	149	
貝類	10	18	17	10	11	14	9	21	18	12	140	
その他の水生動物	11	8	9	6	5	11	11	6	11	7	85	
不明の水生動物	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	
食品	281	280	339	384	419	500	485	443	369	464	3,964	1.13%
飲料用アルコール	131	140	155	159	155	201	171	173	141	180	1,606	
健康食品	20	23	42	50	64	111	88	98	64	97	657	
しょうゆ・塩	40	37	35	28	45	53	33	32	32	27	361	
その他の食品	90	80	107	147	155	135	193	140	137	156	1,340	
計	714	761	809	873	896	992	916	864	812	1,003	8,640	2.46%
総受信事件数	36,125	36,515	38,542	38,150	36,578	36,233	33,460	32,179	29,789	33,932	351,503	100.0%

表2-1 JPIC 自然毒、食品の起因物質別受信件数と連絡者、年齢層の内訳(2007年)

	受信 件数	連絡者		年齢層					
		一般市民医療機関	その他	5歳以下	6~19歳	20~64歳	65歳以上	不明	
植物	468	345	88	35	325	37	60	33	13
シュウ酸塩含有植物	50	39	10	1	33	5	6	4	2
ジャガイモ	44	41	3	0	31	4	8	0	1
ドングリ	41	38	3	2	38	3	0	0	0
胨酸配糖体含有植物	36	27	5	4	22	7	5	2	0
スイセン	26	11	14	1	5	3	8	8	2
ギンナン	10	7	3	0	5	1	3	0	1
スズラン	9	7	1	1	7	0	1	0	1
アサガオ	8	4	2	2	7	1	0	0	0
トリカブト	7	0	7	0	0	0	5	1	1
オシロイバナ	7	6	0	1	6	1	0	0	0
ヨウシュヤマゴボウ	5	1	3	1	3	2	0	0	0
シキミ	4	3	1	0	4	0	0	0	0
チョウセンアサガオ	4	2	2	0	2	0	1	1	0
ソテツ	3	2	1	0	0	1	0	2	0
ヒガンバナ	3	1	2	0	2	0	1	0	0
ナンテン	3	2	1	0	3	0	0	0	0
バイケイソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
クスノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の毒性植物	115	82	21	12	83	6	14	10	2
無毒の植物	54	44	5	5	46	1	3	3	1
毒性不明の植物	39	30	4	5	28	2	5	2	2
きのこ	40	11	27	2	9	1	16	10	4
有毒きのこ	21	2	18	1	1	0	10	8	2
ツキヨタケ	2	0	1	1	0	0	1	0	1
ドクツルタケ	2	0	2	0	0	0	2	0	0
ドクササコ	2	1	1	0	0	0	0	1	1
マジックマッシュルーム	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シロタマゴテングタケ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の有毒きのこ	15	1	14	0	1	0	7	7	0
無毒のきのこ	1	0	1	0	0	0	0	1	0
不明のきのこ	18	9	8	1	8	1	6	1	2
水生動物	31	15	16	0	1	3	21	3	3
フグ	12	4	8	0	0	1	7	2	2
貝類	12	6	6	0	0	0	10	1	1
その他の水生動物	7	5	2	0	1	2	4	0	0
不明の水生動物	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食品	464	410	48	6	389	29	28	11	7
飲料用アルコール	180	171	9	0	169	6	2	1	2
健康食品	97	81	16	0	75	8	8	5	1
しょうゆ・塩	31	23	7	1	25	3	3	0	0
その他の食品	156	135	16	5	120	12	15	5	4
計	1,003	781	179	43	724	70	125	57	27

表2-2 JPIC 自然毒、食品の起因物質別受信件数と状況(摂取理由)、症状有無*の内訳(2007年)

	受信 件数	状況(摂取理由)							症状		
		不慮			故意			不明	有り	無し	不明
		誤認、 誤食等	労災	不明	自殺	その他	不明				
植物	468	453	0	1	6	0	0	8	141	320	7
シュウ酸塩含有植物	50	49	0	0	0	0	0	1	28	21	1
ジャガイモ	44	44	0	0	0	0	0	0	10	34	0
ドングリ	41	41	0	0	0	0	0	0	3	37	1
青酸配糖体含有植物	36	36	0	0	0	0	0	0	8	28	0
スイセン	26	26	0	0	0	0	0	0	20	5	1
ギンナン	10	10	0	0	0	0	0	0	5	5	0
スズラン	9	9	0	0	0	0	0	0	1	8	0
アサガオ	8	8	0	0	0	0	0	0	1	7	0
トリカブト	7	0	0	0	6	0	0	1	6	1	0
オシロイバナ	7	7	0	0	0	0	0	0	1	6	0
ヨウシュヤマゴボウ	5	5	0	0	0	0	0	0	1	4	0
シキミ	4	4	0	0	0	0	0	0	0	4	0
チョウセンアサガオ	4	4	0	0	0	0	0	0	2	2	0
ソテツ	3	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0
ヒガンバナ	3	3	0	0	0	0	0	0	2	1	0
ナンテン	3	3	0	0	0	0	0	0	0	2	1
バイケイソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
クスノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の毒性植物	115	110	0	0	0	1	0	4	20	93	2
無毒の植物	54	52	0	1	0	0	0	1	16	38	0
毒性不明の植物	39	38	0	0	0	0	0	1	14	24	1
きのこ	40	39	0	0	1	0	0	0	28	9	3
有毒きのこ	21	20	0	0	1	0	0	0	18	1	2
ツキヨタケ	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ドクツルタケ	2	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1
ドクササコ	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0
マジックマッシュルーム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シロタマゴテングタケ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の有毒きのこ	15	15	0	0	0	0	0	0	14	1	0
無毒のきのこ	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
不明のきのこ	18	18	0	0	0	0	0	0	9	8	1
水生動物	31	29	1	0	0	0	0	1	26	4	1
フグ	12	12	0	0	0	0	0	0	12	0	0
貝類	12	11	0	0	0	0	0	1	10	1	1
その他の水生動物	7	6	1	0	0	0	0	0	4	3	0
不明の水生動物	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食品	464	439	0	2	10	8	0	5	136	322	6
飲料用アルコール	180	177	0	0	1	2	0	0	57	121	2
健康食品	97	87	0	0	6	2	0	2	19	77	1
しょうゆ・塩	31	27	0	0	3	0	0	1	6	23	2
その他の食品	156	148	0	2	0	4	0	2	54	101	1
計	1,003	960	1	3	17	8	0	14	331	655	17

*JPIC受信時までに発現した症状の有無

表3 AAPCC 自然毒、食品、食中毒等の受信件数(1998~2007年)

種別	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	計	総受信件数 に対する割合	
皮膚炎発症植物	122,578	113,864	106,385	105,560	84,578	77,169	74,611	68,847	64,238	60,214	878,242	3.34%	
皮膚刺激性植物	28,646	25,774	22,854	22,914	13,569	10,232	9,610	9,266	8,492	7,744	159,103		
胃腸刺激性植物	20,771	19,488	16,124	17,888	14,102	13,503	13,037	12,311	10,839	9,913	149,976		
シユウ酸塩含有植物	13,833	13,025	12,380	12,010	11,952	10,868	10,258	8,780	8,024	7,529	108,659		
青酸配糖体含有植物	3,170	3,519	2,970	3,072	2,653	2,730	2,842	2,617	2,822	2,886	29,291		
強心配糖体含有植物	2,553	2,498	2,297	2,566	2,054	1,471	1,461	1,430	1,405	1,402	19,137		
アラニン含有植物	2,103	1,856	1,616	1,477	1,286	1,170	1,255	1,166	1,119	1,127	14,175		
抗コリン作用植物	1,025	988	1,036	1,144	1,072	973	1,058	975	1,047	1,037	10,355		
抗コリン作用植物	386	366	360	404	478	414	436	385	412	451	4,062		
興奮作用植物	1,016	397	299	315	202	132	137	143	150	110	2,801		
抑制作用植物	282	71	92	131	277	332	353	315	324	282	2,469		
有毒アルカロイド含有植物	245	245	231	186	177	178	254	171	168	215	2,072		
ニコチン含有植物	237	254	285	225	142	138	126	156	160	171	1,894		
コルヒチン含有植物	16	24	21	25	12	11	22	8	19	17	175		
その他の毒性植物	3,762	3,734	3,745	3,626	4,592	5,383	5,008	4,870	5,451	5,086	45,237		
無毒の植物	20,723	19,132	17,996	17,526	15,094	13,993	13,559	11,927	10,976	9,836	150,586		
毒性不明の植物	23,698	22,493	22,099	22,225	16,936	15,721	15,395	14,357	12,828	12,388	178,150		
毒性不明の植物	9,539	8,990	9,399	8,483	5,722	5,252	5,801	7,146	9,183	7,733	86,349	0.35%	
まの	623	782	623	667	766	791	994	849	806	773	7,674		
知覚作用きのこ	208	181	160	167	177	162	158	151	164	133	1,661		
胃腸刺激作用きのこ	77	36	36	44	66	71	52	25	25	30	462		
モノアミン含有植物	40	41	30	44	56	43	50	40	63	38	445		
シクロペンタド	23	37	23	34	31	37	44	36	47	51	363		
イボテン酸	6	9	2	10	8	16	16	36	19	22	31	159	
ムスカリン	17	20	8	1	21	11	12	10	10	16	132		
コプリン	3	3	1	2	4	3	3	1	5	0	25		
オレニン	12	7	12	16	36	18	25	17	29	17	189		
その他の毒性きのこ	174	181	191	195	293	233	228	192	215	151	2,013		
無毒のきのこ	8,656	7,699	8,308	7,297	7,304	6,867	6,999	5,806	7,797	6,493	73,226		
毒性不明のきのこ	78,690	74,980	67,010	67,149	75,813	69,122	69,815	64,464	65,115	77,957	711,215	2.71%	
食品/食中毒(水生動物を含む)								1,737	1,125	1,376			
水生動物								991	410	762			
麻痺性貝毒								192	273	203			
サハゲ								177	158	187			
シガタラ								205	140	116			
テトロドトキシン								14	16	18			
ニシン属の魚毒								168	128	90			
その他								5,464	5,255	5,112			
食品								5,309	5,125	4,986			
トウガラシ/コンショウ								159	130	124			
グルタミン酸ナトリウム								15,795	15,771	19,320			
細菌性食中毒(確定)								242	206	366			
ボツリヌス								889	1,022	3,388			
その他								14,664	14,543	15,968			
不明								41,469	43,964	52,149			
食品によるその他の有害事象								10,768	11,503	14,138			
食中毒(疑い)								17,216	18,228	22,294			
腐敗食品								10,957	11,615	12,957			
食品/添加物								2,327	2,620	2,780			
その他の有害事象								140,457	139,534	145,904			
計	211,107	197,840	182,789	181,192	169,113	154,543	153,327	140,457	139,534	145,904	2,837,152	100.0%	
総受信件数	2,402,766	2,368,496	2,426,951	2,555,487	2,689,520	2,715,199	2,776,925	2,765,968	2,760,764	2,837,152	28,267,325		

表4 AAPCC 自然毒、食品、食中毒等 起因物質別受信件数と年齢、状況(採取理由)、転帰の内訳(2007年)

種別	受信件数					状況(採取理由)					要加療					転帰		
	年齢					不慮	故意	その他	副作用	症例数	無症状	軽症	中等症	重症	死亡	計		
	5歳以下	6-19歳	20歳以上	不明	合計													
皮膚刺激性植物	60,214	40,011	8,020	7,070	53,494	2,127	212	1,356	4,598	10,606	4,987	1,181	72	0	16,846			
皮膚炎症状植物	9,913	7,075	1,057	1,092	8,960	291	15	190	676	1,880	764	136	6	0	2,788			
シユウ酸塩含有植物	7,744	3,695	1,107	1,852	6,702	148	88	303	649	851	902	267	3	0	2,023			
香酸配糖体含有植物	7,529	6,020	762	455	7,114	204	8	38	340	1,558	1,145	81	3	0	2,787			
香酸配糖体含有植物	2,896	1,753	536	385	2,614	102	5	87	151	597	97	28	0	0	722			
強心配糖体含有植物	1,402	788	229	277	1,279	68	3	20	194	374	81	25	7	0	487			
ソラニン含有植物	1,127	785	116	135	1,023	25	8	35	112	331	73	12	0	0	416			
抗コリン作用植物	1,037	345	392	176	512	400	3	17	490	183	93	272	28	0	576			
幻覚作用植物	451	115	180	77	192	174	21	6	153	47	58	66	8	0	179			
抑鬱作用植物	282	161	36	29	207	24	1	9	17	45	16	4	0	0	65			
有毒アルブミン含有植物	215	77	61	51	189	19	4	4	61	51	27	11	1	0	90			
ニコチン含有植物	171	57	47	36	122	28	0	3	50	47	30	18	0	0	95			
興奮作用植物	110	28	20	41	78	11	1	3	25	18	16	4	0	0	38			
コルヒチン含有植物	17	14	0	0	15	0	0	0	1	3	1	0	0	0	4			
無毒の植物	5,086	3,405	808	458	4,533	146	14	115	437	1,231	324	67	9	0	1,831			
無毒の植物	9,836	7,248	981	725	8,715	163	20	331	337	1,132	445	57	5	0	1,839			
毒性不明の植物	12,988	8,445	1,678	1,281	11,239	324	21	195	903	2,258	915	133	2	0	3,308			
きのこ	7,733	4,943	1,352	1,189	5,957	1,218	12	143	2,634	2,887	800	577	35	0	4,328			
幻覚作用きのこ	773	30	302	235	83	511	5	5	458	40	112	257	9	0	418			
胃腸刺激作用きのこ	133	56	32	35	91	36	0	3	56	38	32	21	1	0	92			
イボテン酸	51	10	11	16	14	29	0	0	33	9	6	12	6	0	33			
シクロペプチド	38	0	6	24	16	14	0	3	26	1	5	10	6	0	22			
ムスカリン	31	4	21	21	20	1	0	3	19	2	13	6	1	0	20			
モノメチルピロラジン	30	0	3	22	19	3	0	6	17	1	13	6	1	0	21			
コプリン	16	8	2	5	12	2	0	1	7	6	4	2	0	0	12			
その他の毒性きのこ	17	6	2	7	12	2	0	1	7	3	8	0	0	0	11			
混合型、無毒のきのこ	151	70	12	38	113	3	1	14	29	33	19	7	0	0	59			
不明のきのこ	6,493	4,359	981	784	5,576	614	6	107	1,982	2,754	616	260	11	0	3,641			
水生動物	1,376	76	134	1,000	1,199	5	2	126	328	37	339	153	12	0	541			
麻痺性貝毒	762	36	62	612	723	0	0	29	120	9	214	45	4	0	272			
シガテラ	203	8	15	135	145	0	0	44	61	11	48	37	2	0	98			
シガテラ	187	9	14	130	143	4	0	28	81	6	32	48	4	0	90			
テトロドトキシン	116	16	38	51	107	1	2	3	32	8	24	8	1	0	41			
ニンシ属の魚毒	18	0	0	13	14	0	0	4	5	1	3	1	0	0	5			
その他	90	7	5	59	67	0	0	18	29	2	18	14	1	0	35			
食品	5,112	872	982	2,358	4,074	123	26	773	289	76	2,082	138	3	0	2,299			
トウガラシ/コンショウ	4,988	858	982	2,290	4,027	123	26	706	278	71	2,045	126	2	0	2,244			
グルタミン酸ナトリウム	124	14	10	68	47	0	0	65	10	5	37	12	1	0	55			
細菌性食中毒(菌)	19,320	2,683	2,888	8,740	15,835	42	163	536	2,042	1,123	2,830	831	31	1	4,816			
ボツリヌス	366	52	39	204	310	6	15	12	92	85	23	7	1	0	1,333			
その他	3,386	553	532	1,394	2,738	4	22	42	455	229	387	129	6	0	751			
不明	15,668	2,078	2,117	7,142	12,767	32	126	482	1,495	809	2,420	695	8	0	3,832			
食品によるその他の有害事象	52,149	14,882	7,281	19,533	42,513	630	943	2,999	4,176	4,398	5,643	1,473	32	0	11,487			
食中毒(疑い)	14,138	1,651	1,908	7,806	12,388	6	147	219	1,702	404	2,518	799	14	0	3,735			
偽造食品	22,294	5,710	3,444	8,494	19,217	58	422	588	985	2,474	1,306	234	2	0	4,016			
食品/添加物	12,957	6,888	1,529	2,303	9,833	508	264	829	984	1,354	1,143	204	10	0	2,711			
その他の有害事象	2,760	633	400	1,130	1,065	58	110	136	505	107	676	236	6	0	1,025			
計	145,904	63,067	20,467	39,890	123,072	4,145	1,358	5,333	14,067	19,068	16,711	4,353	185	1	40,318			

表5 JPIC 自然毒および食品による急性中毒受信件数(2003~2007年、患者2名以上)

	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	計
自然毒	58	60	74	64	75	331
植物	41	30	47	35	39	192
スイセン	11	6	7	7	15	46
シュウ酸塩含有植物	6	4	5	1	4	20
ジャガイモ	3	3	5	3	5	19
青酸配糖体含有植物	2	2	5	4	1	14
チヨウセンアサガオ	3	1	2	3	1	10
バイケイソウ	3	2	3	2	0	10
ヨウシュヤマゴボウ	0	0	2	0	2	4
トリカブト	0	1	1	0	0	2
その他の毒性植物	7	7	13	6	7	40
無毒の植物	1	2	3	4	0	10
毒性不明の植物	5	2	1	5	4	17
きのこ	9	21	11	17	24	82
有毒きのこ	7	15	7	12	13	54
無毒きのこ	0	2	1	1	1	5
不明きのこ	2	4	3	4	10	23
水生動物	8	9	16	12	12	57
貝類	3	2	11	5	4	25
フグ	1	1	3	2	5	12
その他の水生動物	4	6	2	5	2	19
不明の水生動物	0	0	0	0	1	1
食品	11	9	8	18	11	57
飲料用アルコール	3	1	1	1	2	8
健康食品	2	0	2	2	3	9
しょうゆ・塩	1	1	2	2	0	6
その他の食品	5	7	3	13	6	34
計	69	69	82	82	86	388

表6-1-1 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) 一植物一

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢	連絡者	発生場所	状況 (投取理由)	受信時までの 症状	経緯
1	スイゼン	2月	福岡県	3名	3歳	その他 (保育所)	保育所	不慮	悪心、嘔吐	保育所の敷地内で園児3名がスイゼンの花と葉を食べた。食べて10分後に園児の1名が吐いた際、初めてスイゼンを食べたことに気づいた。
2	スイゼン	3月	広島県	2名	60歳	一般市民	居住内 (その他)	不慮	悪心	二らと間違えてスイゼンの葉を入れてお好み焼きを作り、2名で食べた。お好み焼きには葉を10本程度を入れて作った。
3	スイゼン	3月	奈良県	3名	86歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	悪心(1名)、嘔吐(2名)	自宅に植えていた二らを採取し、キノコと肉とともにソテーして食べた。食事 中より気分不良となり、食べた30分後より嘔吐した。以前は二らを茹でていた が、家人の話では現在は二らは茹でないという。引き抜いたところ、根に 玉がついていたので、今、庭に植えているスイゼンを二らと誤認した可能性 がある。
4	スイゼン	4月	長野県	3名	71歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐、下痢	スイゼンの葉を二らと間違えて卵とじを作って家族3名が食べた。畑の同じよ うな場所に二らとスイゼンを栽培していたところ、目が悪いため、間違えてス イゼンの葉を判り取ってしまった。
5	スイゼン	4月	新潟県	3名	40歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、下痢、脱力、 手足の冷感	二らと間違えてスイゼンの葉を卵とじして食べた。食べた直後に嘔吐した ため、確認したところスイゼンであった。
6	スイゼン	5月	青森県	2名	89歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐	二らと間違えてスイゼンの葉を卵とじにして、大量に食べた。電話相談のた め、詳細は不明である。
7	スイゼン	5月	新潟県	2名	30歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	スイゼンの葉を二らと間違えてお好み焼きに入れて食べた。たくさん食べた1 名は症状が出たが、その後は落ち着いている。もう1名は食べた量が少量 で、症状は出ていない。
8	スイゼン	5月	長野県	2名	不明	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	二らと間違えてスイゼンを食べた。現在、受診途中であり、詳細は不 明である。
9	スイゼン	6月	長野県	2名	4歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	庭に生えていたスイゼンの球根をタマネギと間違えて肉と一緒に炒め、家族 2名に食べさせた。スイゼンの球根はおいしくなかったもので、全部は食べず多 くを残しているが、一緒に炒めた肉は全て食べた。
10	スイゼン	10月	広島県	2名	85歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、下痢	スイゼンの球根を誤って大根の煮物に入れて家族2名で食べた。食べた量 は球根半分、1名は直後から嘔吐、下痢が発現し受診した。もう1名は初め 症状がなかったが、下痢が出始めており、これから受診する。
11	スイゼン	10月	神奈川県	3名	81歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし	スイゼンの球根を鍋の具材と一緒に煮込んだ。球根自体は食べなかった が、他の具材を3名で食べた。買い物に行った際、スイゼンの球根が、同時 に購入していたサトモと間違えてしまい、間違えて調理をしたようである。
12	スイゼン	11月	兵庫県	2名	8歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	口腔咽喉違和感	スイゼンの球根を食用と勘違いして摂取した。口の中のしびれを訴えてい る。
13	スイゼン	12月	兵庫県	2名	3歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	二らと誤認してスイゼンを食べた。
14	スイゼン	12月	京都府	2名	13歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐	麻婆豆腐を作る際に、二らと誤りスイゼンの葉を利んで調理した。1名が食べ た直後に症状が発現したが、風邪のせいだと思っていた。翌日、もう1名が麻 婆豆腐の残りを食べたところ、同じ症状が発現したので、スイゼンを食べたこ とに気づいた。スイゼンは自宅の庭で二らの隣に生えており、子どもが誤っ て摘み取った。
15	スイゼン	12月	東京都	2名	75歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	スイゼンの葉をニンニクの葉と間違えて、キャベツと炒めて食べた。

* 患者年齢は症状がある場合は症状が最も重い患者、症状がない場合は弱者(小児、高齢者)の患者年齢とした

表6-1-2 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) 一植物一

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢*	連絡者	発生場所	状況 (採取理由)	経過
16	ジャガイモ	3月	福島県	3名	1歳5か月	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし
17	ジャガイモ	3月	奈良県	3名	7歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	口腔咽喉違和感
18	ジャガイモ	7月	山梨県	100名	3歳	医療機関	幼稚園	不慮	悪心、嘔吐、腹痛 幼稚園で、2~5cm大の新ジャガイモをゆで、園児100名に皮のついたまま渡した。園児自身が皮をむきながら食べた後、7~8名が嘔吐、10数名に悪心があり、他に腹痛のある子どもが数名いる。 双子の子どもが、少し芽も出たジャガイモを生のままかじった。
19	ジャガイモ	10月	福岡県	2名	1歳代	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし
20	ジャガイモ	11月	京都府	3名	7歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし
21	フユサンゴ	10月	埼玉県	2名	5歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし
22	ムラサキマムシグサ	6月	栃木県	2名	9歳	医療機関	学校	不慮	口のしびれ、流涎 小学生がムラサキマムシグサを少量採取したため、教師もかんでみた。受診したのは小学生のみで、教師の症状は不明である。
23	クワズイモ	9月	栃木県	2名	59歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	口腔咽喉痛み イモガラシと間違えてクワズイモをけんちん汁に入れて家族2名が食べた。食べた直後から痛みがあったので、すぐ吐き出したため、採取した量は少量である。舌のしびれも出てきた。
24	クワズイモ	12月	埼玉県	2名	1歳1か月	医療機関	居住内(自宅)	不慮	口腔咽喉痛み、悪心 双子の子ども2名が、野菜植物のクワズイモの茎を少量食べ、医療機関に受診している。
25	サトイモ	11月	千葉県	2名	56歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	口腔咽喉痛み 知人からもらったサトイモの茎を水にさらして煮た物を1名が食べてみたところ、喉がチクチクした。もう1名に食べてもらったところ、同じ症状が発現した。
26	チュウリップ	6月	新潟県	4名	小児	医療機関	学校	不明	不明 小学生4名がチュウリップの球根を採取したと、小学校から電話相談があった。
27	チュウリップ	6月	長野県	2~3名	30歳代	医療機関	居住内(自宅)	不慮	なし ニンニクと間違えて、チュウリップの球根を刻みバスタドに入れて食べてしまったと電話相談があった。薬剤師からの問い合わせのため、詳細は不明である。
28	ヨウシュヤマゴボウ	10月	埼玉県	5名	4歳	医療機関	屋外	不慮	なし 子ども5名がヨウシュヤマゴボウを採取した。詳しい状況や食べた量は不明である。
29	ヨウシュヤマゴボウ	11月	兵庫県	2名	4歳	その他 (保育所)	屋外	不慮	なし 保育園の園児2名が散歩中にヨウシュヤマゴボウの葉を食べた。
30	ハルノゲシ	4月	大阪府	数名	10歳	その他 (小学校)	学校	不慮	なし 5年生の子ども数名がハルノゲシの茎を折って食べた。苦いといって唾を吐いた。
31	ウメ	7月	長野県	2名	4歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし 子ども2名が庭木のウメを探って果肉を食べていた。黄色く発酵しているものも食べているようだが、中には一部青い部分もある。
32	ユリ	7月	東京都	2名	30歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし ユリの花びらが落ちて手で拾った時に花粉がついたので、手を洗った。その手でフドウを洗って2つずつ子どもと食べたが、その後、手に花粉の黄色が残っている事に気づいた。

* 患者年齢は症状がある場合は症状が最も重い患者、症状がない場合は弱者(小児、高齢者)の患者年齢とした

表6-1-3 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) — 植物 —

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢*	連絡者	発生場所	状況 (採取理由)	受信時までの 症状	経緯
33	キョウチクトウ	7月	愛知県	5名	7歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし	認知症の家人が漬物の下にキョウチクトウの葉を飾りのつもりか、1枚置いた。漬物の汁に溶け出した可能性もある。漬物を食べたのは5名で、葉を置いた本人は食べていない。
34	エンゼルトランペット	9月	岩手県	2名	78歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	口腔咽頭違和感、口現	他の植物と間違えて、庭に咲いていたエンゼルトランペットの花をゆでて酢の物にして食べた。すぐにおかしいことに気づいたため、1口程度しか食べていないが、症状があり医療機関を受診した。
35	ギンナン	11月	兵庫県	2名	31歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、めまい	成人女性2名がギンナンを約40個食べ、5時間後に症状が発現した。
36	ソデツ	12月	福岡県	10名程度	9歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、腹痛、下痢	地域のもちつき大会があり、近所の住民がソデツの実を食べられると言ったため、子どもたち10名ほどが食べた。当院を受診しているのは3名である。
37	不明の植物	4月	愛知県	数名	60歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	過呼吸、血圧低下、嘔吐、下痢、体温低下	家で栽培しているアズキナ(ユキザサ)と思い、家族数名で料理して食べた。症状が出たのは1名のみである。
38	不明の植物	10月	山梨県	2名	5歳	その他 (保育所)	保育所	不慮	口腔咽頭違和感	子ども2名がフエンスにまきついていたツル状の植物の実を1個、口に入れてかんだ。舌いってすぐに吐き出した。
39	不明の植物	12月	埼玉県	2名	38歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	しびれ、倦怠感、軽度意識障害	畑から採ってきた植物をゴボウと思い、調理して家族2名食べた。全身にしびれがあり、力が入らない状態で、意識がもうろうとする時もあったが、症状は改善してきている。

*患者年齢は症状がある場合は症状が最も重い患者、症状がない場合は弱年(小児、高齢者)の患者年齢とした

表6-2-1 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) 一きのこー

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢	連絡者	発生場所	状況 (発症理由)	受信時までの 症状	経緯
1	タマゴデングタケ	10月	東京都	2名	72歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、下痢	2日前に山で採って来たきのこを、その夜に家族2名で食べた。食べた後、2名ともに症状が発現し当院へ受診したが、現在も症状が治まらないので再度受診した。
2	ドクツルタケ	10月	山梨県	3名	48歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、腹痛、下痢、無尿、肝機能異常、腎機能異常	ドクツルタケ1本をほうとう鍋にして9名で食べ、1名が重症、もう1名も当院に入院している。他1名は他院にて快方に向かっている。
3	ドクササコ	10月	宮城県	2名	87歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	しびれ(四肢末梢)、疼痛	家人が山で採取したきのこを、3回に分けて調理して食べ、医療機関へ搬送されて来た。
4	ドクササコ	10月	秋田県	2名	高齢者	一般市民	居住内(自宅)	不慮	手足疼痛	1ヶ月前に家族2名がドクササコを食べ、1名はすでに退院し、もう1名は通院治療中である。
5	ツキヨタケ	10月	宮城県	10数名	不明	その他 (消防署)	不明	不慮	不明	10数名がツキヨタケを食べたと消防署から問い合わせがあった。すでに医療機関へ受診した患者と、まだ受診していない患者がいる。食べた量や時間、症状の詳細については不明である。
6	ツキヨタケ	10月	福島県	6名	31歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐	前日の夜、家族6名でツキヨタケを食べた後、全員に激しい嘔吐があった。症状は翌日の明け方まで続いたが、その後、症状は落ち着き、回復に向かっている。きのこは保健所で鑑定した結果、ツキヨタケと判明した。
7	クサウラベニタケ、フウセンタケ属きのこ	10月	千葉県	2名	57歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、下痢	探ってきた2種類のきのこを調理して2名で食べたところ、症状が発現した。1名が受診したが、もう1名の状態は把握できていない。
8	ニセクロハツ	9月	京都府	10数名	63歳	医療機関 (4名)	屋外	不慮	嘔吐、手足のこわばり、肩の痛み、めまい、ふらつき	前日の昼、きのこを4名で食べ、直後に嘔吐した。他3名は嘔吐のみであったが、1名は他の症状も出て、本日、医療機関に受診した。受診時、嘔吐、手足のこわばり、肩の痛み、めまい、ふらつきがあった。他3名は受診していない。きのこは捨てたため、持って来てはいない。
9			大阪府	10数名	87歳	医療機関 (2名)	屋外	不慮	嘔吐、腹痛、下痢	前日の昼、きのこを家族2名で食べ、1名が15時間後に嘔吐した。もう1名に症状はない。
10			奈良県	10数名	74歳	医療機関 (1名)	屋外	不慮	血尿、排尿困難、腹痛、嘔吐	2日前にキノコのクロハツを生焼きで食べた。ニセクロハツの可能性もあるかもしれない。大阪や京都などから10数名が集まって食べたようで、そのうち数名が入院しているという。
11	ナラブサ	10月	群馬県	2名	58歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	腹痛、発汗、腸音亢進	家人が採取したきのこを全て調理し、鍋にして2名で食べた。採取2時間後より症状が発現した。他の人に配ったりはしていない。
12						医療機関	居住内(自宅)	不慮	腹痛、嘔吐、腸音亢進	きのこを食べた患者がこれから転送されてくるため、情報を確認しておきたい。
13	モタセ	9月	群馬県	2名	74歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐	友人からもらったきのこを家族2名でみそ汁にして食べた。みそ汁にたきのこを1名は8~7本、もう1名は少量食べ、しばらくして症状が発現し、医療機関へ受診した。現在、症状は回復に向かっている。
14	モタセ	10月	栃木県	2名	68歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	下痢、流涎、発汗、嘔吐	近所からもらったモタセというきのこを家族2名が食べた。1名はアルコールを同時に摂取し、症状が発現したため受診した。もう1名は初め症状があったが治まり、病院には付き添いのために来た。

* 患者年齢は症状がある場合は最も重い患者、症状がない場合は軽症(小児、高齢者)の患者年齢とした

表6-2-2 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) 一きのこ一

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢*	連絡者	発生場所	状況 (採取理由)	受信時までの 症状 (理由)	経緯
15	モミタケ	10月	都道府県	2名	60歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心	家族2名でモミタケを食べた。2名のうち1名が悪心を訴えて受診した。
16	エリンギ	9月	群馬県	2名	72歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	めまい、脱力	14時間ほど前に、市販のエリンギを大量に食べた。
17	ナメコ	9月	不明	4名	3歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	悪心	いつも山で取っているナメコを、今日は水洗いしただけで加熱せずに、家族4名で食べてしまった。
18	不明のきのこ	7月	神奈川県	2名	2歳代	一般市民	不明	不慮	不明	子ども2名がシイタケに似ているきのこを食べた。
19	不明のきのこ	9月	広島県	2名	36歳	医療機関	屋外	不慮	嘔吐、腹痛	きのこを焼いて10本程度を2名で食べた。
20	不明のきのこ	10月	群馬県	5名	22歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	悪心、腹痛、発汗、嘔吐、顔面紅潮、寒気	ハタケナメタジと思って採取したきのこを家族5名が摂取し、1時間半後から全員に症状が発現している。重症の3名は他院を受診し、軽症の2名が当院を受診している。
21	不明のきのこ	10月	東京都	2名	40歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	息苦しさ、動悸、下痢、顔面紅潮、寒気	山に登って採取した人にもらったきのこを、煮物にして2名で食べた。多く食べた1名に症状が出ているが、少量しか食べていないもう1名は症状はない。
22	不明のきのこ	10月	北海道	2名	成人	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐	家族2名できのこを食べ、1名が30分後に、もう1名が1時間後に嘔吐したため、医療機関を受診した。
23	不明のきのこ	10月	群馬県	2名	61歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	下痢、流涎、発汗	家族2名できのこを食べ、発汗が止まらなから、発汗が止まらなから、もう1名には下痢、もう1名には流涎がみられている。
24	不明のきのこ	10月	熊本県	2名	59歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	徐脈、嘔吐、下痢	山登りをし、木に生えていたシイタケに似たきのこを採って、自宅で塩焼きにして食べた。食べて1時間後から嘔吐があり、続いているので医療機関を受診した。食べた量が少ない1名の方が軽症である。きのこは近所に配ってはいない。

*患者年齢は症状がある場合は症状が最も重い患者、症状がない場合は弱者(小児、高齢者)の患者年齢とした

表6-3-1 自然毒に関する受信事例の詳細(2007年、患者2名以上) 一水生動物一

事例No.	起因物質	発生日	都道府県	患者数	患者年齢*	連絡者	発生場所	状況 (採取理由)	受信時までの 症状	経緯
1	サザエ	4月	埼玉県	2名	38歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	倦怠感、手のむくみ、紅斑	3日前の夕食にサザエを1個食べたところ、30分後に紅斑が出て、3日続いた。今も倦怠感や手のむくみなどの症状がある。食べたのは2名だが、症状が出たのは1名である。
2	ホタテ貝	7月	東京都	3名	72歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし	ホタテ貝のウロを家族3名で食べた。説明書にウロは食べないよう」と書いてあったの後に気づいた。
3	バイ貝	11月	千葉県	4名	45歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	悪心、嘔吐、めまい	バイ貝5個を刺身用にスライスして家族4名で食べたところ、その後しばらくしてから全員に中毒症状が現れた。
4	カキ	12月	山梨県	3名	53歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	嘔吐、腹痛、下痢、白血球増多	家族3名で生ガキを4個食べた。他院に一度受診した後、当院を受診した。生ガキは店で購入したものである。
5	フグ(幼魚)	1月	鹿児島県	3名	62歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	口腔咽頭違和感(1名)	購入したダシジャコ乾燥品を使って、みそ汁を作り、家族3名で飲んだ。商品の中に5cm位のフグの幼魚らしい魚が入っていたので、捨てた。1名が口のひりひり感を訴えているが、他の2名に症状はない。
6	フグ	11月	大阪府	数名	71歳	医療機関	屋内の公共スペース(店舗)	不慮	嘔吐、腹痛、下痢、関節痛、脱力	2日前に飲食店でフグを食べ、翌日に他院を受診した後、本日当院へ受診してきた。数名が採取したが、症状があるのは受診した1名のみである。
7	フグ	12月	大阪府	10名	成人	一般市民	屋内の公共スペース(店舗)	不慮	しびれ	忘年会で10名がフグの鍋を飲食店で食べた。帰宅してから舌の先がピリピリして、右足もしびれたような感じがした。右足のしびれは消えたが、舌先のピリピリ感はまだ残っている。
8	フグ	12月	山口県	5名	17歳	医療機関	居住内(自宅)	不慮	口渇、しびれ	家人がフグの調理免許を持っていて、自宅でフグを調理して食べたところ、症状が出て医療機関を受診した。2名のみに症状があり、現在入院中である。
9	フグ	12月	兵庫県	5名	成人	一般市民	居住内(自宅)	不慮	しびれ、皮膚違和感	市販の調理済みフグを鍋にして食べ、症状が出ている。鍋を食べた他の人には、全く症状は出ていない。
10	ソウシハギ	1月	熊本県	4名	10歳	一般市民	居住内(自宅)	不慮	なし	釣ってきた魚をカワハギかと思っ調理して食べた。食べたときに身の味などが違うので調べてみたら、ソウシハギであることがわかった。調べた資料では内臓に毒があると書かれているが、身と肝臓を食べた。
11	イシガキダイ	6月	東京都	数名	30歳代	医療機関	不明	不慮	口腔咽頭違和感、腹痛、下痢、しびれ	前日、自分たちで釣った魚を煮魚にして数名が食べた。本日2名が受診し、受診していない他の数名も同様の症状が出ているという。食べた1時間後に全身と喉のしびれがあり、さらに1時間後に腹痛と下痢が現れた。
12	不明の魚(シガテラ毒の可燃性)	5月	鹿児島県	10名	62歳	一般市民	屋外	不慮	嘔吐、下痢、呼吸困難、しびれ、皮膚痛	釣った魚の身は刺身にして、肝は炊いて10名で食べた。肝を食べた5名に5時間後から症状が現れた。食べた2日後に医療機関を受診し、症状がひどくなったら再度受診するように言われた。

*患者年齢は症状がある場合は症状が最も重い患者、症状がない場合は弱者(小児、高齢者)の患者年齢とした